

あかつき



山崎宇治長氏（上林暁鏡会副会長）

1934年黒潮町生まれ。高知大学文学部（現人文学部）卒。
1956年四国銀行入行。1988年（株）高知流通情報サービス入社。
1989年同社代表取締役専務就任。
2008年黒潮町振興計画審査会会長・黒潮町雇用促進協議会会長に就任。
2010年退任。
信条は「紙難は汝を玉にし読書は人を創る」

第一回上林暁文学講座

2021年10月30日（土）

演題 私の中の上林暁像

一、はじめに

私、文学に関しては、学生時代に夏休みの宿題で斎藤茂吉の『万葉秀歌』二巻の書評を、七〇八枚ぐらいの原稿用紙にして先生に提出し、その中に「斎藤茂吉は、とにかく和歌も含めて文学全体で日本近代の啓蒙的な大きな役割と存在感を持った方です。」という趣旨のことを書きました。

先生のコメントは、「茂吉をもってそういう存在とすることは、必ずしも当たるまい。しかし、論旨明快、概ね良好」という一定の評価をいただいた程度でございます。文学そのものには直接縁のない存在です。

それと、私の家系についても少しお話しをさせていただきます。

上林さんの直ぐ下の妹の伊郁子さんという方が、私ども上川口の古い親戚に嫁いで来られておりまして、お墓も共通なものですから、よくそのおばさんたちと一緒に参りに行ったこととございました。

それから、もう一つは、上林さんのご息の育夫君とは、学校の同年代でありまして、中学一年から三年間は、机を並べた仲ということで、私も上林さんの生家に時々邪魔したり、育夫君も私の家に来てくれたりしました。そういう関係がございまして、上林さんについても、それなりの興味と関心は持っていたところとございました。

育夫君は、すでにお亡くなりになっておりますが、彼は鹿児島大学の建築工学の教授を歴任し、大変優秀な人でした。その中学時代のことを今、懐かしく思い出しているところでございます。

私は、上林さんご自身とはもちろん直接お会いしたことはないのですが、旧制中村中学二年生の時、昭和22年12月22日でございます。一年前が南海大地震ですから、その一周年の翌日に全校生徒が講堂に集められて、上林さんのお話を聞きましたけれど、それが、ただ一回のみ上林さんの風貌に接したときでございます。

講演の順序は、お配りした資料の「2.の非凡な人―文豪からの手紙」と、「芸術院会員ということ」について、私なりに調べたこと。そして、三つめは、ふるさとの語り部についてでございますが、もともとは大和朝廷の天皇家の古い伝承を語る人たちのことを「語部」と言ったのですが、そのときは、平仮名の「り」がなかった。有名な「四万十川の青き流れを忘れぬや」についてもお話させていただきます。

次に、エピソードでございますが、この度の講演を依頼されるにあたりまして、いくつか頭の中に思い浮かんできたことがございまして、それを是非皆さんのお耳に入れたく、そういったことを三つ四つお話させていただきます。それから、終わりに、上林さんへ私なりの思いを託した下手な俳句らしきものを、二句つくりました。こんな流れでお付き合いをお願いいたします。

二、非凡な人―文豪からの手紙と「芸術院会員」

非凡な人ということですが、上林さんという方は、元々が地味といえますが、華やかさというのはそれほどではなく、一般的には無いとされております。しかし、文豪の皆さんからの手紙の内容と、芸術院会員ということをし調べてみると、これは大変なことだというカルチャーショックのようなものを受けたわけでございます。

一口でいいますと、自らを鼓舞し奮い立たせるのです。自らを鼓舞し続けた執念の人というの、私が一言でいわせていただく上林さんへの思いでございます。執念というのは、18年間床に着きながら、それでも文学に対する執念を燃やし続けたその生き方です。

生涯の概略を申し上げますと、明治35年の生まれで昭和55年までございましたから、生涯が77歳です。明治35年というのが1902年にあたりますから、二十世紀になって間もなく誕生されて、二十世紀を八割がた生きてこられた方、

そういう歴史の流れを、頭の中に捉えていたいたら、後々、お話の方も理解しやすいかなと思うのでございます。

作品の数が、千篇あるらしいです。小説、随筆、評論、最近では昭和52年の中村高校が準決勝に輝いた春の甲子園大会。それについても書いておられますから、そういったものの全部合わせた千篇。その中で、故郷に関するものが、概ね百篇だと言われているところでございます。

ふるさとへの思いも大変なものがあつたというふうに思います。昭和27年の50歳で最初の脳溢血を発症されます。この時に、左半身が不随になるのです。それから10年後に再発しまして、そこから寝たきりで、18年間も病床に着かれるということになるのでございます。

作品全集が全19巻、この図書館にも蔵書されておりますけれど、19巻と言いましたら、新聞紙を広げて私の両手に余るくらい、そのくらいの分量の著作を書かれておりますから、これは、本当に頭が下がる思いですね。それから、上林さんは非凡な人と申し上げましたけれども、実は知性意と知性意は、情という面から考えると、感性であったり愛情であったりというふうな捉え、或いは意志、知性意の意は、意志で自分に対して、あれだけの己に打ち買ったという意味の意志でありました。知性意、いづれを取りましても、本当にスーパーマンであつたということが言えると思います。

なぜそんなことを申し上げるかと申しますと、先ほちょっと触れましたように、知性の部分については、百五十六人の文豪との手紙による接触が証明しているからこそこのことで、言うまでもありません。

それから、知情の情、感性ということになりますと、色彩感ですね。上林さんご自身の故郷、瀬川にいたり、四万十川にいたり、後川にいたり、入野松原にいたり、こういった自然に対する色彩感を感性という表現で使わせていただくわけですね。

それともう一つ、情の部分、愛情の情ですが、東京に行かれても、地元の後輩のために色々な

本であったり、資料なども青年の皆さんにしばらくの間送って提供されたということがございます。

それから、意の方ですが、これは今さら言うまでもなく、18年間の病床にあつてその執念を燃やして、そのことだけで己に打ち勝つという凄さというものは、これはお話するに余りあると思います。

そして、文豪からの手紙も見せていただく機会にめぐまれましたが、その文豪の手紙、実物ではもちろんないのですが、コピーを見せていただいて、自分なりに解釈をしたわけでございました。

この中には、伊藤聖、井伏鱒二、大原富枝、亀井勝一郎、富安風生、曾野綾子、正宗白鳥、林芙美子、室生犀星、小林秀雄、こういった人たちの心の絆というような、表現しきれない心と心との素晴らしい交流というものがうたい込められております。

文は人なり、と言いますけれども、文豪の皆さんの本当の心からの上林さんに対する思いというのが出てきます。高知県の出身の女流作家の一人に、上林さんを人格者ということで評価されている方がおられました。こういう方の中に文化勲章、文化功労章、芸術院会員、その他の多くのですね、その賞を得られた方がたくさんいらっしゃるわけですが、そういう人たちの交流というものが上林さんの人間性、人格を全て象徴しているというふうな印象をもちろん持つわけです。

それから、芸術院会員というのも調べておりましてびっくりしたのですが、全員で百二十人という定員枠がありまして、この中で二十人が部門ごと、領域ごとに分かれていきます。

美術、それから文芸、音楽、演劇、舞踊の五部門に。もちろん上林さんは、文芸部門に位置付けられるわけですが、この文芸の会員の定員枠が、37名の枠らしいですね。この37名の会員は、会員の皆さんの推薦と投票で選ばれて、初めて会員になれるわけです。ですので、簡単になれるものではありません。その希少性、この値打ちに改めて驚きました。

そういうことで、上林さんは非凡な人という表現で大変失礼なのかも分かりませんが、そんな存在であられたというふうに思います。



三. ふるさとの語り部

ー 四万十川の青き流れを忘れめや

資料の3. のふるさとの語り部というところになりますけれども、これは、わたくし小説家ということでは定着しておりますけれども、千編の作品の内の約百編が故郷に関係するものであるということをおぼろげに申し上げましたが、このふるさとの語り部は「四万十川の青き流れを忘れめや」と申しています。

ここで四万十川とありますが、ご自身の中のふるさと四万十川というところにわざわざ「しまんと」と仮名を振っておりますので、「四万十川（しまんと）」の青き流れを忘れめや」で、もちろん五七五の調子なのでこれはさておき、この、「青き流れを忘れめや」の「忘れめや」という言葉というのは、我々の日常語では使わ

れないのでこれも調べてみますと、万葉集の歌集にはよく使われているようです。

どういう意味かといいますと、「忘れませんよ」とか、忘れることはないよ、そういう単純な自分の言葉の発信ではなくて、相手に対して忘れることは絶対がない、「忘れないよ」という強い決意で、忘れめやというものがあられるわけです。

我々は、普段の会話の時には使いませんので、ぴんと来ないのかもしれませんが、この「忘れめや」というような使い方は、万葉集に限ってでございます。まして、平安時代の古今和歌集以降は、使われていないという研究もございます。一般用語ではないものですから、どんなことだろうと時々疑問に思っていたのが、いま申し上げたようなことになるわけです。

さらに、青き流れということについても考えてみました。これは、もちろん今の四万十市の西下町ですね、こちらにお帰りになった時にちよいちよいご利用されら宿の窓から四万十川を見て、それで、青き流れと。ところが四万十川という川は、ご存じの通り長さが二百キロ近い大きな川ですので、激流であつたりとか、青き流れであつたりという、色々な表現の仕方があられるわけですね。青き流れの青きというのは、もちろん川が清くないといけません。それから、空も青くないと川の青といけません。きれいな青い色にはならない。仁淀ブルーという仁淀川のブルーはよく言われるのですが、仁淀のブルーというのは、山間地帯を流れていますから、森林があつてのこと。四万十川の青さというのは空の青さが影響しているのだと思います。

本日、会場にお越しただいて宮川昭男さんに、「どこまでも青き天あり土佐の空」という俳句がございます。奥様の恵子さんの句には、「山間の芒やさしき風を待つ」ともございます。これは、感性であるとか、あるいは色彩感であるとか、「日本人独特」という領域に入っていくんですね。

上林さんご自身も、「青き」というところにずいぶん魅力を感じておられたと思います。一般的に日本人というのは、色彩感覚に非常に長

けた人種でございますけれども。特にこの西南地区の我々の郷土という所の空と海と山ですね、この色彩というのが本当に生活していく中で、人々の心情にも影響を与えているのだと。上林さんは、それを鋭敏に敏感に捉えていたんだというふうに思われます。

色彩感の話になりますが、こういう小説の中にある文章もでございます。「私の郷里は、夏は空、山も野も海もすべて紺青と濃緑である」。それから、また別のところではですね、「逢坂の山は春には一面に山つつじの花で被はれ、そこを隧道が穿つてゐる」。上林さんのこの一文だけでですね、上林さんがいかに自然に対して、そして、色彩に対してですね、鋭敏な方であつたということがよくわかると思います。

私は、自分の暗記ノートの中に取込んでおるわけでございます。山つつじというのはあまり言わないんですけども、サツキと違つた自然に生えるつつじですので、私自身もこの場所を歩いて通つた経験がありますので、この景色風景というのはよく分かる訳でございます。

こういう色彩感とか感性とか美意識というふうなものというのは、やはり上林さんという人間の根底に流れていたんじゃないかと思われまふ。この近くに建てられた碑に、「梢に咲いてゐる花よりも地に散つてゐる花を美しいとおもふ」というのがありますが、これがやはり上林さんご自身の本当に大事な感性だというふうに思います。

それからですね、この中村の街ですね。もちろん大方の田ノ口も含めたこの界隈についてですが、終戦が昭和20年でしたから、その10年後の昭和30年代くらいから始まつた日本の大復興の中で住宅開発とか、市街地の拡大とかですね。そういうことがずいぶん、交通のインフラもありますけれど、大変な進展、発展ぶりが見られたわけですね。鉄道中村線が開通したのが昭和45年の10月ですから、51年前になりますけれども、それをきっかけにして、さらに今のご承知のような中村の街ができました。

今、黒潮町側から四万十市に入りまして、サニータウンで始まる古津賀の所を通つてですね、

中村の街中へ入るのですけれども、今のあの街に入る橋は中村大橋といえます。

しかし、昔は佐岡橋が、中村に入る導入部の橋でしたから、その橋を通して街に入るとラン力という所があります。そのラン力をずっと行きまして、今の天神橋通りになるのですが、そこ行くまでの左側の部分というのは、今はサンリバーがあるなど、大変な発展ぶりですけども、あそこは本来は沼地です、その沼地には、今の中村役所の辺りの天神さんという山の土を持ってきて埋め立てて、景色に大きな変化があったんですね。

特に「柳の葉よりも小さな町」であったり、この「小さな蟻瀬川のほとり」という作品の中に古い町並みの情景がよく出てきます。

こういう大きな変革の状況、当時から本当にかけ離れた今の状況というのは、やはり上林さんご自身が故郷の語り部として、それを残してくださっているんだという、こんな捉え方も私はできると思います。

大きく変遷するかけがえのない私たちの故郷もとの風景はこうだったよと。そういうことを上林さんご自身が素晴らしい表現筆致です描かれている。これこそが、私たちにとは大きな財産であるうと思っています。

四. エピソード

次に、4.のエピソードですが、私が先ほど申しましたように、思い出せば出すほど、人の世というのは、何でもこんなに繋がっているのだからかと思ったりします。

というのは、上林さんが大正の10年、11年、12年ぐらいには熊本第五高等学校に行かれて過ごされるわけですが、この高等学校の在学時代にですね、校友会の文芸雑誌に応募しまして、その三等に入選をされるわけです。

そして、その選考委員が、八波則吉さんという英文学の先生でした。この八波則吉先生というのは、私が小さいときに絵本で何冊か、小学校一年か二年の頃に、その絵本の著者に「やつなみのりきち」と、ありました。

この八波則吉先生に、ご子息が二人おられまして、一人は八波直則先生、もう一人はお名前を失念しましたが、このお二人が、高知大学の先生で、私にご縁ができました。

お兄さんの八波直則先生は、英文学科で、私も同窓会の活動で学生時代に色々縁があったものですから、一度ご自宅にもお伺いしたこともございました。

こんなふうに、ひとつのきつかけと繋がりとというのは、自分でも思い出しつづくりする訳です。

それから、上林さんが東京大学を卒業されるときの卒業論文が、ロバート・ブローニング。この人は、イギリスの詩人で19世紀の方でありました。文の題は、

「Love and Humanity of Browning」で、ブローニングの愛と人間性というものでした。

ブローニングというイギリスの詩人が、私の高等学校1年の時の、英語の教科書に出てまいりまして、ご承知の方もいらっしゃるかもしれませんが、春の朝」というイギリスの田園風景を描いたものです。

一行目は「時は春 春は朝 朝は七時」というような、二十行ぐらいの最後は「すべて世はこともなし」ということで終わるわけです。

ここに日本風景論という本を持って来ていますが、この本というのは、上林さんと中村の図書館長Yさん（中学時代の友人）と一緒に旅館に泊まった時に、夜話に霧を見たり、川を見たりするのですけれど、その時の話題にこういうのがあります。

「四万十川の霧がきれいだ」と書いてあるとY君が言うのですね。

そしたら、上林さんも「志賀重昂が取り上げているんだねと、私は驚きを示した」こういう二〜三行がこの中にはあるんです。

この日本風景論というのは、たまたま私も何年前に読んでいまして、明治20年代に出された本ですが、この本を読むのは、極限られた知識人であったのではないかと思うのです。

日本風景論には、確かに四万十川の霧とか、

沖ノ島や、鵜来島のことにも触れている。ここにも出ています志賀重昂さんという人は、内村鑑三と同級生で、北海道の札幌農学校で勉強された方で、後で政治家になったり、人文地理学者であり、多彩な人生を送られた方ですけども、こんな本のが図書館長のY君との対話の中に出てくる。

実は、このY君という図書館長さんが、私も縁がありまして。高校一年の時に、図書館で確か『坊ちゃん』だったと思いますが、読んでおりましたら、面白くて止まらなくなりました。どうしても持って帰りたくなって、図書館の担当の方に相談すると「それは出来ません。」と言われました。けれど、引き下がる気持ちはないものですから、だいぶん粘ってみました。

とつとつ館長さんが出て来られて、
「そんなに読みたいんですか。それではいいですよ。」ということで、館長さんから直々のお許しをいただいて、家に持って帰り、すぐ翌日にお返しした。その時の館長さんが、このYさんであったということもございました。

それから、上林さんが、往復四里ですから、16キロの道のりを学校へ通うのに、もともとは高い差し歯の高下駄を履いて行きよったけれども、それを見かねたおばあさんが、藁で草履を作ってくれたので、それを履いて通っていました。が、街へ入ったら町の靴屋さんに預けている靴に履き替えて学校へ行っていた。

こういうこともございます。
実は、私の住所は上川口で、中村の中学まで往復36キロはあると思いますが、南海大地震以降は、中村の下宿先が無くなったものですから、昭和22年の三学期からは歩いて通い始めました。もちろん自転車やバスとかはありません。約一年近く歩いて通いました。所要時間は三時間半か四時間かかります。

当時の中村の街まで入っても、中学校の場所は、またずっと北のほうになりますから、ずいぶん時間もかかったものです。それも今となってはよく歩いたものだあとだったりもするのですが。

上林さんもおばあさんが作ってくださった藁

草履を履いて行ったというのを読みますと、その当時の我々の姿を思い出して、上林さんと共通項を見出したようなそんな思いがしました。エピソードといえばそんなことでございます。考えてみますと、人間というのはこの世の中においでいるいるなもので何らかの繋がりがあるのだなあと。不思議な因縁を感じてなりませぬ。

上林さんに18年間、本当に手足となつて過ごされた上林さんの妹さんの睦子さんが、9月14日に亡くなりになりました。

謹んでお悔やみを申し上げます。

五. おわりに

最後に、上林さんへの尽きない思いを、下手な二句に託しまして、私の話を終わりたいと思います。

その下手な二句というのが、この資料の最後でございます。

暁の句碑炎帝は和らげて

太陽が、今年も暑かったですがガンガン照っている。しかし、上林さんの句碑には、さすがの太陽も、ちよつと気を遣つて熱を和らげているんだなあと、いう思いであります。

それから二句目は、

暁に文繻けと諭される

上林さんは、私に特別に、勉強しなさいよ。本を読みなさいよ。という教えを授けてくれたし、何よりも先ほど申しましたように、その「忘れめや」の「めや」という使い方であつたりとか含めてですね。

「青き流れ」の「青き」とは一体どういうものかということ突き詰めて考えなさいよということ。

そういうふうに、物事は関連して考えていく癖を、本を読むことによって身に付けなさいよと。そんなことを私に諭してくれているのだなという思いであります。

ご清聴ありがとうございました。

演題 文芸界の楽しい話

第二回上林暁文学講座 2021年11月8日（月）



佐藤洋二郎氏（作家・『季刊文科』編集委員）

1949年福岡県生まれ。中央大学卒。元日本大学学術学部教授。

26歳時のデビュー作「湿地」を『三田文学』に発表。

その後、外国人労働者を文学に取り入れた『河口へ』（集英社）や『夏至祭』（講談社）で注目される。

また、全国の神社、離島巡りが趣味。神社は数千社、離島は100島以上歩いた。

文学受賞作に『夏至祭』（第17回野間文芸新人賞）、『岬の蜩』

（第49回芸術選奨新人賞）『イギリス山』（第5回木山捷平文学賞）がある。

日本文藝家協会常務理事・日本文藝賞選考委員。

小説は人間の生きる哀しみと孤独をテーマに書く。

（講演内容は、講師の承諾を得て、一部編集をしています。）

今ちょうど季刊文科で、私小説作家というのを連載している。私小説作家が非常に好きなものですが、中でも、上林さんは好きですね。なぜかという、上林さんは心に響く言葉を持っている。いい言葉に出会うというのは、実は、いい人に出会うということだと僕は思っております。そういう意味で、彼の一つ一つの言葉が響いてきた。

私小説作家というのは、日本だけ。決して、ノーベル賞候補とかにはなりません。私小説は海外ではエッセイみたいに捉われてます。日本では、非常に私小説が根を張ってる。私小説は何かという19世紀の時に、自然主義派とロマン主義派というのが出てきます、後期と前期ですね。その私小説は自然主義の流れを汲んで、自然主義というのは当時カメラはありませんから、しっかり見るということですね。ロマン主義を簡単にいうと、自分の想像力でいろんな世界を見ていくということになります。一番いい自然主義の見方はしっかりと目を開ける。目を開けると人のいろんな欠点が見えるし、どんな人なのか分かる。ロマン主義に関しては、目をつぶると豊かな想像力とか湧いてくる。そういう感じですね。

日本の場合は、自然主義から私小説。実は、私小説を非常に嫌う人もいます。作家の中には村上春樹さんたちを支持する人もおります。しかし、日本というのは脈々と明治から、小説がヨーロッパから入ってきて、二葉亭が墮落の時代からですね、やりだして。そして早稲田文学を作って。明治の20年ですかね。その後に三田文学が、明治の44、45年くらいに対抗するようにロマン主義として出てきた。

これが今でも大きく、日本の中で、対立はしていませんが、容認もしない。ただし、私小説の場合は、多分ノーベル賞にならないでしょう。だけといいい小説が多い。講談社の文芸文庫なんかを見ると私小説の人が多いですね。なぜかというと、本は全く売れませんが時間とともに

に底光りしてくるわけですね。要するに、人間をしつかり捉えている。人間の感情をしつかり捉えている。想像力じゃなくてですね、それが日本人の心にマッチしたんじゃないか。

私小説の中にも、志賀直哉さんをはじめ、破滅型作家、葛西善蔵とか、家庭を顧みない私小説の人みんな貧乏しますから、生活的には難しいですけどもそんな中に嘉村磯多などがあります。太宰治さんとかですね。

太宰さんは、上林さんと仲良くしてましたから、死んだときに上林さんがショックを受けたということとは、ここで多くの専門家が話されているから、割愛しますが、破滅型じゃなく、もう一方の心境小説を書く流れの中に、志賀直哉さんと尾崎一雄さん、それから上林さんですね。（中略）

僕がもし生前に生きていたらお会いしたかったのが、やっぱり上林さんですね。上林さんが作家として僕の中では一番言葉を持っている人ですね。言葉が灯台みたいに僕たちの生き方に對して道案内をしてくれる。照らしてくれる。普段は何も持たずじやべるとはんですが、間違えるといけないのでちょっとだけメモしてました。上林さんはこう言ってる訳です。

「僕は将来、自分が立派な作品を書いて持て囃されたりなどしたいとは思わぬ。ただ、コツコツと努力を重ねて行つて、最後まで、少しずつでも登つていく作家になりたい」。

色々な先生方もよく取り上げていますけど、僕もこの言葉を非常に気に入っていて、僕も小説家の端くれだから、こういう人間にならなきたいけない。謙虚にならなきたいけない。決して威張るまいと思つています。

それから、奥様が病院に入っているときに、根っからキリスト教徒よりも、自分はキリスト教徒になりたい。非常に、こう優しい。お顔が優しいですね。僕お会いしたことないんですけど、写真なんか見て非常に優しい。こういう言葉に出会ふと、どんな人だろうと会いたくなりますよね。

もう一つは、ゼミの学生にも言っているんですけど、上林さんの「不遇でありたい。そして

で常に開運の願いを持ちたい」と言っている。この言葉に出会ったとき、びっくりしました。あなた寝たきりでしよう。不遇じゃないのか。そして開運の志を持ちたいって。とんでもない人だ。この言葉を見たときに、僕は若い時から案外と小説は読んでたんですが、この言葉と出会ったときに、どういう人なのかと、むさぼるように読みました。

ここで講演の機会をいただいたんですけど、こういう作家日本にはいないんじゃないか、と思いました。実は、この文学館に来るのは二回目です。この前来た時には、又吉さんの写真があったから来たばかりだったのかな。僕はそれのあとで来ました。（中略）

上林さんの不遇でありたい。こんな不遇の人がいるのか。世界でも珍しいんじゃないですかね。寝たきりで、口述筆記で。何なんだろうと考えました。僕は、これに勇気づけられて、自分のやりたいことは手放しちゃういけないんだと学びました。いい人間になるには、いい人のまねをすればいいだけです。いい人のまねを。やくざのまねをすると、やくざに引張り込まれちゃうから、やくざになつたりしますけど。その人に会わなくても、いい言葉に出会えばいい。人に会つたと等しい。その人のまねをすればいい。

実は、僕たちはここにいます人も、皇室の人もみんな死にます。必ず死にます。上林さんの小説の中に不幸は幸福の絶頂にやってくるよという話もありました。またそこでびっくりしました。

僕たちは死にますけど最後に残るのは何か。実は、言葉だけなんです。言葉以外は、何も残らない。碑が残るんじゃないか。碑はそのうち崩れてきます。言葉しか残らない。

歴史という言葉があります。あの意味は何かという。歴というのは、歴然とさせる。はっきりさせるということです。

史と言うのは、言葉という意味です。ふみとか文とかいう言葉。歴史は言葉がないと遡ってはいけません。言葉は、警察の取り調べと同じです。自由と同じですから、かつこつたり、罪

を逃れようと嘘をつきます。それは、何かという物的証拠があるわけですね。

この歴史というのは、自白だけでなく、言葉だけではなくて、物的証拠と一致しないとだめなんです。

だから、言葉があるかないとどうなるかという、伝承とか伝説とか、民話とか神話とかになります。

僕は40年近く神社を歩いています。神社には、言葉がない言葉がある。物的証拠がありますけれど、偽の歴史もあります。庶民が交渉したり、正史じゃないことですね、これがおもしろくて僕は全国を回っています。

日本の場合は、歴史が何回かわりました。一番多く変わったのは、実は明治維新です。あれは文化革命ですよ。なぜかというところ、どこにいたか分からなかった天皇を神格化させるために、神道降下を作りました。神仏分離をしました。廃仏毀釈ですよ。お寺さんを全部潰していきました。一番潰したのは、薩摩です。九百幾つあったのを全部潰して神社にした。それから高知、ここ土佐も六百幾つあったのを、四百幾つに減らしましたから七割くらい実は潰されている。天皇を神格化するために作った。そうしなきゃいけなかった。

だから皆さん、神社は全部古いと思っているでしょうけど、日本の神社はほとんど新しいんです。日本には明治維新の時に、部落が七万幾つありまして、そこに全部神社を作っていたんです。これ本当ですよ。そして、各戸には天皇の写真があった。どこの家にもありました。この維新というのは、一般的には復活とか改革っていいですよ。それは何かというと、王政復興ですから、天皇中心の国家を作るぞっていう革命ってことです。(中略)

僕たちの使ってる言葉は、江戸時代には誰も理解できません。四国は非常に人材が出てます。作家も政治家も画家も。それから、漫画家なんであれだけ多く出てくるかからないけれども人材が輩出されていますよね。その内の一人に上林さんがおられるんですけど。

例えば、中江兆民いますよね、この中江兆民は、中江秋水という。幸徳秋水さんの秋水は、中江兆民からもらった名前。この中江兆民という人は、本当はものすごく偉い人です。(中略)日本が維新後に開国になってからは知らないことがいっぱいあった。フランスやドイツやイギリスやアメリカの言葉。それを、当時の知識人が全部翻訳意識して、今の日本語がある。大変な人です。僕たちが小説を書くようにしてくれた大元の人ですから。立派な人だなとおっています。(中略)

高知がいいのは、やっぱり革命を起こすときに、中江兆民にしても武市半平太にする坂本龍馬にしろ、郷土が多い。安岡正太郎さんもそうですけど。やっぱり革命で、世の中をひっくり返した。というふうには僕は解釈しています。

実は、明治っていうのは、本当にいい教育をやった。優秀な人は師範学校に入れる。それから、士官学校に入れる。お金はただ。むしろお金を出してやる。今の防衛大学みたいですよ。

小学校も中学校も作った。本当に偉いことをやってる本当は、それを何か今の政治家はちょっと知らなさ過ぎる。日本がだんだんダメになるのは、そういうことを知らない政治家が多い。(中略)



国家の源は、人材なんです。人材がないと国は滅びていく。だから、ヨーロッパの宣教師が来た時に、日本はすごい国だ。識字率が八割以上あったわけですから。それは、寺子屋制度とかいっぱいあって、ものすごくいい教育やってたんですね。だから支配できない。

お国を守る人は、お国を守るために案外ということやっただけで、天皇中心の国家は、最後はああいうふうになってしまつて、残念です。非常に。(中略)

小説というのは新しさがいるわけです。ノベルといいますから。新しさは何かというと、人の知らないことを書く。同じ恋愛でも。

上林さんのいいところは、やっぱり時代を捉えている。古い話はだめなんです。文学においては、ノベルですから。ノベルは、フランス語で新しい波っていいですから。新しいものでないと。古いものは、歴史小説書いてればいいけど、その中に現代に通じる新しさがある。ものの考え方とか。それが上林さんの中には非常にあると僕は思っています。

次に上林さんのいいのは文章がいい。静かだ。言葉が躍ってないんです。偉ぶってない。文章は文体といいますが、文体とは思想の入れ物ですから、自分の考えがここに入るんです。

或いは生き方が、そこに入るんです。だから、僕は上林さんに本当に会いたかったです。お会いしていないけど、多分文体から見ると、非常に落ち着いているし、目線は低いし、配慮に効く人だったんじゃないかな。

配慮というのは、人に対する優しさですよ。人間だけが持つ。動物なんて配慮しません。食うか食われるかです。人に配慮することとは、優しい人だと僕は思っているから、奥様とのやり取りとかですね、非常に優しくった人ではないかと、勝手に想像します。こちらには、ご親戚の方もおられるかもしれませんが、知人の方もおられるかもしれませんけど。僕は小説とか、そういう中で上林さんをそういうふうには勝手に捉えているだけですけど。

しかし、小説を書くことに限っては、多くの人を犠牲にしている。そこは厳しい。そっちの方には厳しい。本当は厳しさも優しさなんですけれど。そこに抜き差ししないものがあつたんじゃないか。その葛藤はずっとあつたんじゃないか。家族を食わせなくてはいけないから。

私の師匠は、坂上弘さんで方ですが、昨年八月にお亡くなりになりました。生前に、この度の私の講演依頼のお話をしたところ、彼も上林さんに非常に興味がおありでしたから、僕も行きたいなあ。いいなあ。と言っておられたので、僕の次を頼んでおきますと返したけれど、逝つてしまつて本当に残念でした。坂上さんは、心境小説を書く人でしたから、上林さんをとっても好きだったみたいです。

ある時、坂上さんと安岡章太郎さんと一緒に酒を飲んでたとき、安岡さんに、私は坂上さんの一番弟子ですが、二番弟子はいませんと言っていると、安岡さんは、じゃあ私は孫弟子になるよと言つて笑っていました。その顔が良かったですね。安岡さんも坂上さんも、そして上林さんも笑顔が似ていらつしやる。非常に良いですね。実はこの文学者というのは欲がないですね。

NHKテレビの収録で、芥川賞作家の又吉さんが僕の授業を受けて、そのあと僕と対談をしましたけれど、向こうが聞き役になって、僕だけペラペラ喋って、それでどうも話が噛み合わなくて、結局放送されたのは、僕の授業だけだったんですね。又吉さんは良い人だったです。対談はカットされてしまったけれど、文学者というのには少し無理があるような気がして、可哀想に思いました。でも、書かせば確かに売れますから良いのでしょうけれど、物事ってやはり、一芸に秀でる人ではないと思っています。あれもこれも多芸の人は無理です。

特に文章をやる人は、時間があつても書けないし、時間がなければ、書けないのは当たり前。時間があつても書けない作家は、書けなくなると厳しいですから、職業の中でも自殺する人が一番多いし、作家は、早死にの職業の典型ではないかと思えます。

そこへ行くと上林さんは凄い。毎日書いていた。しかも午前中に。大したもんだと思います。僕も真似して365日書いていますけれど、上林さんはもっと凄い。こんな人は世界中探してもいないのではないだろうかと思います。

こういう人たちがいる所には歴史ができる。歴史がある町というのは、必ずその後を追う人が出てくる訳です。なので、この黒潮町には必ず作家が出てくるはずですよ。僕はそう思ってるし、出ない方がおかしい。ここには形があるから。形があるってことは、上林さんの文字の物的証拠がある。出ない方がおかしいというように考えています。

町の人がいづまでも大切にしたり、今誰か知りませんが、僕は、浦安に図書館が初めてできたとき、その時の市長の票がいっぱい集まったんです。なぜかというと、図書館を作っただけで票が集まったという有名な人でしたから。実は図書館って票田になるっていうことをみんな知らない。

あともう一つ、観光を誘致するにも効果的。観光客が来るんですよ、お金からなくない。ところが町の人は、いろんな事情があって、これを潰す。誰も文句言わないから、行政とかもやりやすいから。やりやすい所からしちゃうめなんです。本当は必要でない所からやらなくちゃいけないのに。絶対無用の用である訳で、役に立たないものが、一番役に立つということがあるわけですから。それを全国回っていると、あそこも潰れた。ここも潰れた。図書館を縮小したとかです。(中略)

文学賞を辞退する人いますよね、芥川賞も。はただの新人賞で文藝春秋が持っている賞。そして、僕や村上春樹らがいただいたのは文芸賞。新人賞は、講談社だった。後発の三島賞は、新潮社だったがこれは何故か。直木賞は大衆小説です。(中略)

芥川賞が一番古いですから、NHKとタイアップしてるわけですよ。必ず9時のニュースに出すので、早く決めないといけないわけです。それなら野間新人賞とか、三島賞もやれよというけどそうはならない。僕が貰ったからという

わけじゃないけど、実は、この二つの賞は、長編本と単行本になるんです。だから、非常に時間がかかるし、力がいるです。

芥川賞は、百枚書けば取っちゃう。年に二回あるから。

野間賞が、一番生きています。僕も辛うじてこの年歳までできたのは野間賞の御利益かなと思っっています。僕は、芥川賞も断っているし、三島賞も取ったのでちよつと偉ぶって言います。実は、断る人も結構いるんですよ。

銀行員だとか、商社の人だとか、課長だ部長だとかいうのと同じで、日本酒の品種の賞と同じくらいと思ってる人多いんです。うまいものは、自分で見つけなきゃだめだということ。日本酒も旨いものは自分で見つけるしかない。

それには、何が必要かということ、上林さんがお世話になった川端さんがよく言っていました。作家修業は文章修行。だから、私淑してかわいがってもらった、手まで握られた。同性愛じゃないかと書かれたりしますが、確かにあの人は少女愛では有名でした。少女は好きだった。同性愛は僕は全く知りませんけど。上林さんは、かわいい顔してるから、誘惑されたかは知りませんけど。そういう私淑していた人ですね。でも、みんな文章旨いんですよ。

だから、上林さんも文章うまいのは当たり前。川端さんがそう言っているんです。作家修業は文章修行だ。だから、上林さんの文章は非常にいいでしょう。目線が低くて、威張らなくて。むしろ、私淑した志賀さんや川端さんよりもいいと僕は思った。川端さんは、大衆小説も書いている。しかし、上林さんは、新聞連載は一切していません。(中略)

昔、文豪といったら、津和野の出身の森鴎外でした。戦後文豪といったら誰になりましたか。漱石さんになった。漱石さん文豪じゃなかった。近年です。しかし、漱石さんのはしゃべり言葉で読みやすい。鴎外さんは読みにくい。文語と口語混じりだから。今の人読めませんよ。読者がいなくなります。鴎外さん。

しかし、その漱石さんは、十年間ずっと新聞小説書いている。フリガナも打っている。上林

さんは、絶対やってない。貧乏していてもです。この差。志って重要だと思っっていますから、こういうことが文章に現れるんだなと思います。

川端さんは、浅草で何かエンターテイメントを書いているし、エンターテイメント雑誌にも書いています。エンターテイメント雑誌っていうのは、今でいうと本屋さんに行くと、上の方に小説と書いて講談社は、小説現代。日刊現代とか、週刊現代、あれは講談社です。それから、新潮社は、小説新潮になるんです。そして小説宝石の光文社。それから、集英社の小説すばる。実は、雑誌の上に小説と付いているのは、全部エンターテイメントです。エンターテイメントの人は流行作家になれる。大金持ちになれる。

ただ、今は本が売れないと、僕らも売れなくなりましたが、僕は昔偉そうに、本が売れなくても注文が来る作家になりたいと言ったら、たたかれました。お前、そんなこと言ったら仕事なくなるぞと。本当になくなりました。(中略)

僕の大学は、日大芸術学部って一番古い大学。専門学校みたいな大学ですけど。一番古い学校だから人材も輩出していますけど。可哀想だなと思うのもあります。奥さんとか親御さんが来て、作家になれますかと言われる。親御さんが分からないのに僕が分かるはずないだろうと言いたい。それは、やめると。(中略)

作家も何人か出たけど、きつい世界じゃないでしょうかね。僕も、十年くらい没原稿でした。時々何で諦めなかったのかなって考えても分からない。

上林さんは、何で子どもの時から作家になリたかったのかというのがよく分かるんです。何かやりたい人は、そこが欠けているからやる訳です。自分が何者かって、書くっていうことは、自分を知るっていうことです。(中略)

書くということは何か。よく僕たちは子ども

の頃に読書しなさいといひます。読書って皆さん、本を読むことですか。それは半分だけです。読だけです。書が付いてますよね。これも中江兆民が言ったのか福沢諭吉さんが作ったのか知りませんが。昔は読書って言葉はないですから意識したんですね。読とは読むことです。

経験したこととか。経験する。人間っていうのは、賢い人って二通りしかない。九十歳の婆ちゃんがあの人賢いわね学校も行ったんで賢い。昔の人は行ってませんから特に女性。それは、経験から学んだ知識なんです。小さな子どものときの上林さんは、作家になりたいと思っ

て、中村までいつも古本を買いに行った。お父さんをだまして、お母さんから金をもらって。経験がなくても疑似経験ができる読書をやると、子どもでも賢くなる。賢くなる方法は、この二種類しかないと思ってるんです。

だから、本を読んだ人は賢くなる。疑似経験を

するから。バーチャルな経験を積んでいるから賢い。(中略)

ものを考えたら記す。家族日記を付けなさい。読書感想文、読んだ本を書きなさい。経験したことを書きなさい。書くということは、自己をもっと見つめ直すということです。

経験したことを書かせるのは、自己をもっと見つめなさいということ。私は、この主人公と生き方が違う。私は、この人と考え方が違う。私は、この人と一緒だ。そして、感動する。感動するということも明治からの言葉です。感動っていうのは、感じる体が動く。じっとしておれなくなることを感動だと思っています。だから、僕たちが、スーパーマンを見た子どもの時、母親の風呂敷借りて、塀から飛び降りたりしましたよね。飛べるはずなんです。本を読む人は、絶対に書きたくない。上林さんは、たくさん読んだから、必ず作家になるうと思っ

たんじゃないか。

僕も作家の端くれだから、そういうことを感じています。読めば書きたくなる。私もこういう人になりたい。こんな小説を書きたい。だから私小説の人は、みんな貧乏しています。

尾崎一雄さんがこういうふうに言ってます。「私小説を書く人は生命の危機、経済の危機、家庭の危機、思想の危機のこのどれかひとつがない作家は書く資格がない」と。

でも、上林さんは、四つとも持っている。生命の危機。病気を何回もして、鼻の手術もしてるし、生死を彷徨っている。次に経済の危

機。貧乏ですよ当然、子ども養わなきゃいけない。家庭の危機、やもめなのに後妻をもらわないう。大変ですよ周りは、妹さんやお嬢さんは、特に大変ですよ。そんなもんじゃありません。飄々と書いてる。

物書きというのは、ユーモアがありますから、ピエロと同じで。上林さんがピエロとは言いませんけど。一生懸命なところが滑稽でしょう。

滑稽だけでなく悲しさがあるじゃないですか。大昔の小説はそういうところがあった。ひとりで一生懸命怒って、いいものを書こうとして、人を笑わそうとしたり。周りから見るとどこか悲しい生き方ですね。これに弱いんです。思想の危機。この四つを私小説の人は持っていますけど。上林さんは、プラス脳溢血で倒れて、しゃべることもままにならない。手足が不自由。こんな人が何で小説を書くんだろうと今でも考えます。

僕たちは、自分がコンプレックス持つてるものに対しては、そこを埋めようとするところがあります。お金がない人はお金持ちになりたい。両親が苦労したから、金持ちになって楽をさせたい。学問がないから、お父さん苦労した。だから、俺は勉強する。なんか生涯かけて、作家もそういうところがあります。

作家は、例えば僕もそうですけれど、父親が死んでる人が非常に多いです。遠藤さんもそうだし安岡さんも、それから南部修太郎さん。私小説の野口富士夫さんもお父様は自殺した。非常にそういう人が多い。なぜかというところ、書くことによって自分を見つめようとする人が必ずいるんじゃないか。僕の場合、何で小説書いているか分からない。まして、上林さんは、そんな環境にないのに、お父さんも健在だったし。何があったんだろう。分からない。小説にも出てこないし、多分そういうことでなくて、ずっと若い時から本を読んでいたから。初めは憧れだったんじゃないかと、勝手に想像している。もし生きていたら、どうしてそんなにしてまで小説お書きになるうとしたのか聞きたかった。

もうお会いできないから。それは考えます。

人のことを考えるとか、ものについて考えるということとは、自分について考えることなんですね。人のことをいつぱい考えても、実はそれは自分のことを考えている。だから、人に質問した時は、自分に問題がある。気にしていることを質問したりするわけです。上林さんがもしご存命でお会いできるようなことがあれば、それこそ聞いてみたかったという気がします。

なしてこんな穏やかなない土地の所にですね、魚も取れる、酒も旨い。農業も豊か、昔はですね。今はどこもそうでしょうけど。地図を見れば、今ある川が生きていますよね。川がいつぱいあるっていうのは、栄養がいつぱい入ってくるから、いい魚が捕れたんでしょうね、近海だけで、遠くまで行かなくても。ある意味では、彼の武器ですよ、この豊かな所は。そういうふう考えています。

最後に、上林さんを、育てるか育てないかは、後世に残った人たちですから。やっぱり若い人小説や文学って大人のものですから、本当は子どもはなかなか読みにくいんですけど、親御さんは子どもに買わしている。そうではなくて、良い小説というのは、本来、親が見つけて、子どもにこれを読みなさいって言うのが一番の筋だと思っています。(中略)

私小説家は、嘘を書いたら見破られますから、上林さんが立派な人だと思うのは、絶対に嘘を書かないというところでした。

しかし、家族は困る。本当に困る。だけど、これが業としか言いようがない。私小説家の業ってなんだろうなと、いつも思います。(中略)

私小説家の人は、普通は自分を疑っています。なぜこれを書いているんだと。上林さんも、小説ではそのことをお書きになってないのだけれど、ずっと疑っていて、家族には申し訳ないと思いつつ書いていたと、僕は思うのです。皆さん、上林さんをどうぞ育ててやってください。

第三回上林暁文学講座

2021年11月28日(日)

対談「釣りバカ日誌」..漫画と映画のウラ話



1941年宮崎県出身。東映の助監督を経て、『アイドル』(芳谷圭児/画)にて漫画原作者としてデビュー。代表作に『釣りバカ日誌』を始め『サッチモ』(北見けんいち/画)『夢工場』(弘兼憲史/画)『あさひるばん』(テリヤ山本/画)など多数。『あさひるばん』は、自ら監督を務め映画化。『釣りバカ日誌』は第28回小学館漫画賞受賞。



1950年東京生まれ。中央大学法学部卒。1974年小学館入社。ビッグコミックオリジナル編集部に配属。初代担当者として釣りバカ日誌(原作・やまさき十三、作画・北見けんいち)、三丁目の夕日(西岸良平)、人間交差点(原作・矢島正男、作画・弘兼憲史)立ち上げに関与。1998年アウトドア雑誌ビーパル編集長。2012年高知に移住。2015年高知大学地域協働学部特任教授、2018年より客員教授を務める。

文学講座の第三回は、人気漫画「釣りバカ日誌」(小学館)の原作者で映画監督のやまさき十三さん(80)と、漫画のモデルの黒笹慈幾さん(71)による対談形式で、作品誕生の経緯や映画化された時のことなどを披露していただいた。

漫画は、1979年に連載が始り、好調に売れていたことから、映画化の話が持ち上がり、各映画会社が手を挙げる中で、8年に松竹が山田洋一監督を起用して、提案して来たものの、コミックが売れているので、小学館にしては、映画は要らないというスタンスであったこと、映画が成功するか心配であったが、起用された俳優と会話を聞いて驚いたこと、映画館に来ていた老夫婦の「何年ぶりかねえふたりで映画を観に来るのは」という小声を聞いた時、これは売れると確信したとのこと。

俳優は、故三国連太郎さんと西田敏行さん主演で映画化され、22本が作られる国民的シリーズとなった。

映画が売れて、更にコミックが人気を博す結果となったので、映画の力も凄いと感じたとのこと。

やまさきさんからは、原稿用紙に自筆した第千話と、第千一話のシナリオを文学館にご寄贈いただいた。





■第39回上林晩文学館企画展 「映画：釣りバカ日誌パネル展」

2021年11月7日（日）から
2022年1月31日（月）まで



映画が私たちの日常的な娯楽から消えてもう数十年が経過しました。

それまでは、この幅多地域にも映画館は、小さな芝居小屋まで含めると約三十軒が私たちの娯楽を支えていました。上林晩の映画『あやに愛しき』も1956年に製作され、人気を博したこと、次作が熱望されながらも、今日まで製作されていません。

上林が没後四十年を迎えた現在、地域では二作目を目指す推進グループが発足し、署名活動を始め、20年6月に3832名の署名を集め、黒潮町に提出してきたところです。

また、上林の作品は、お笑い芸人で芥川賞作家の又吉直樹さんが「人間をすごく美しく書く」と賞賛し、ファンであることを公言するほか、19年の大学入試センター試験にも上林作品が登場するなど、俄に脚光を浴びてきました。

しかし、映画化となれば多額の費用が伴うこととなり、黒潮町のみでは叶わず、高知県等の行政機関や映画製作会社等との連携が不可欠になります。

あわせて、地元の機運を高めていく活動も大切であり、上林晩文学館ではその活動の一翼を担う形で、上林作品の映画化へ向けての啓蒙活動を行うため21年3月に「上林作品映画化実行委員会」を任意に組織化し、その活動を始めたところです。

映画の魅力は、何といても大きなスクリーンで迫力のある映像とその音だろう。そして、家族や友人とその感動を一緒に享受できることにあり、これはテレビでは決して得ることのできない独特の雰囲気があると思います。

今回の企画展では、その雰囲気を少しでも享受していただこうと、松竹映画から映画のポスターや撮影シーンの一コマをお借りしパネル展示をしています。

展示作品は、「釣りバカ日誌」のほか、11月28日に上林晩文学講座でご講演をいただく、映画監督のやまさき十三氏の作品「あさひるばん」です。

また、やまさき十三氏が原作の小学館のビッグコミックス「釣りバカ日誌」108巻と「あさひるばん」の展示のほか、今回は特別に漫画家北見けんいち氏とテリー山本氏のご好意により、コミック本の原画も展示することができました。

第32回「あかつき賞」入賞作品一覧表

学年	作品名	児童・生徒名	学校名
小1	てんとくんがうまれたよ	桑田 麻織	南郷小学校
小2	雪山ではじめてのスキー	石橋 愛海	南郷小学校
小3	野鳥の学校	梅澤 陽日	拳ノ川小学校
小4	夢に向かって	宮尾 颯太	南郷小学校
小5	初めてのミシン	小杉 葵	南郷小学校
小6	家族の絆	田邊 唯愛	田ノ口小学校
中1	「努力は人を裏切らない」	松井 碧羽	佐賀中学校

第32回あかつき賞入賞者決まる

審査寸評

小学一年の部の「てんとくんがうまれたよ」は、初めてご自身に弟さんができる時の様子と、これから一緒に遊べる期待と喜びがつぶさに表現され、その観察力と思いやりがよく伝わってきました。

小学二年の部の「雪山ではじめてのスキー」は、大山でのスキー体験がもたらした作品で、初めてのスキーの苦戦ぶり、一面の銀世界での楽しい雪遊びの様子が目に浮かぶように伝わってきました。

小学三年の部の「野鳥の学校」は、これぞオンリーワン。黒潮町の小学校は、こうだという代表作品です。特に、鳥の鳴き声の描写は見事で、読人を惹きつける魅力のある作品でした。

小学四年の部の「夢に向かって」は、ご自身の抱える障がい、正面から向き合って、将来の夢を実現させようとする感動の作品でした。これから、その夢に向かって、頑張っていたきたいと思います。

小学五年の部の「初めてのミシン」は、ミシンの操作の難しさと便利さが、実体験から詳細に描写されており、ミシンを買ってもらった喜びがひしひしと伝わってきました。

小学六年の部の「家族の絆」では、作者の心境が、書き出しの二行の文章で概ね理解できる秀作でした。また、文中には「新しい生活様式」による現代社会が抱える課題が、見事に表現された作品でした。

中学一年の部の「努力は人を裏切らない」は、ご自身の吹奏楽部での苦しい練習の成果を、勉強にも生かして行こうとする決意が現れて、部活の必要性も感じられました。

